

自然としての人間／人間としての自然（後半）

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

第I部 人間環境と自然・社会

第2章 自然としての人間／人間としての自然（後半）

《克服すべき「常識」》

地球や自然は有限だ。だから人間の生産力や欲望に「成長の限界」を設け、あるいは循環型の経済・社会を構築しなければならない。

【5. 無限の自然】

宇宙・自然＝人間にとって無限。

宇宙の終焉より早い、人類の終焉。

人間＝人間は滅ぼせても、宇宙・自然は滅ぼせない。

∴ 人間による因果関係の認識の営み・「なぜ」の追求＝永遠。（人類が生存する限り）

エンゲルス¹⁾：「われわれが当面するのは、そもそも人間認識の産物が至上の妥当性や真理たることの無条件の主張権をもつことができるか、またどのような人間認識の産物がそれをもつことができるか、という問題である。…思考の至上性は、きわめて非至上的に思考する人間たちの系列をつうじて実現され、また真理たることの無条件の主張権をもつ認識は、相対的誤謬の系列をつうじて実現されるのである。このどちらも、人類の生命の無限の持続をつうじてでなければ、完全に実現されることはできない。…この意味で、人間の思考は至上的であるとともに非至上的であり、またその認識能力は無制限であるとともに制限されている。素質、使命、可能性、歴史的な終局目標から見れば、至上的で無制限であり、個々の実施とそのときどきの現実からみれば、非至上的で制限されている」。

BUT 人知＝自然の前で有限。

エンゲルス²⁾：「『生まれくるものはすべて滅びゆく値うちがある』。さらに数百万年がすぎゆき、数十万の世代が生まれかつ死ぬであろう。しかしながら、しだいに尽きはてようとしている太陽熱がもはや極地からおしよせてくる氷をとかすには足りず、赤道の周辺にますます凝集してゆく人間たちがついにその地において生存するのに十分な熱を見いだすことなく、有機的生命の最後の痕跡さえつぎつぎと消滅してゆき、月のように死滅し凍結した一個の球体となった地球が深い闇のなかを、同じく死滅した太陽のまわりのますます小さくなりつつある軌道のうえに周回して、ついにはその太陽に落ちこんでしまうそのときは、容赦なく迫ってきているのである。他の惑星あるいは地球にさきだち、あるいはそのあとをおうであろう。…そしてわれわれの太陽系と同様に、われわれの島宇宙に属する他のあらゆる系もまた早晚同じ運命におちいり、数知れぬ他の島宇宙に属する系や、それどころかそこからの光がこれを受けとめるはずの人間の眼が地上にあるかぎりには決して地球には到達しないような系でさえ、この同じ運命におちいる」。

人間の科学・知の発展≠人間と自然の二分法を前提とした「人間による自然の征服」。

人間の科学・知＝人間による、つねに不十分で暫定的な認識。絶えざる革新の過程にある主体的な認識。

ブレヒト³⁾：「科学の目的は、無限の英知への扉を開くことではなく、無限の誤謬にひとつの終止符を打ってゆくこと」。

ポパー⁴⁾：科学的言明の定義＝できるだけ速やかに反証されるべき仮説。

人間＝目的意識的に自然・社会・宇宙を認識→それに基づき働きかける。＝人間の「自由」。

エンゲルス⁵⁾：「自由とは必然性の洞察である。…自由は、夢想のうちで自然法則から独立する点にあるのではなく、これらの法則を認識すること、そしてそれによって、これらの法則を特定の目的のために計画的に作用させる可能性を得ることにある。これは、外的自然の法則にも、また人間そのものの肉体的および精神的存在を規制する法則にも、そのどちらにもあてはまる…。この二部類の法則は、せいぜいわれわれの観念のなかでだけたがいに分離できるのであって、現実には分離できない…。したがって、意志の自由とは、事柄についての知識をもって決定をおこなう能力をさすものにほかならない。だから、ある特定の問題点についてのある人の判断がより自由であればあるほど、この判断の内容は、それだけより大きな必然性をもって規定されているわけである。他方、

無知にもとづく不確実さは、異なった、相矛盾する多くの可能な決定のうちから、外見上気ままに選択するように見えても、まさにそのことによって、みずからの不自由を、すなわち、それが支配するはずの当の対象にみずから支配されていることを、証明する…。だから、自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配することである」。

【6. 意図せざる結果】

「自然＝無限／人間・人知＝有限」を忘れ去り、あたかも自然が征服可能との傲慢な錯覚。

ex) 「もうこれほど生産力・科学が発展したのだから、これ以上は発展する必要はない」との傲慢さ。

自然＝因果関係を把握して理性的・目的意識的に行為しているつもりの人間に対し、

つねに「予期せぬ結果／意図せざる結果」

→生産力の発展に邁進している人間／生産力の抑制を主張している人間の双方に平等に「予期せぬ結果」。意図せざる結果も含め、地球の生態系：人間の「手つかずの自然」は存在しない。

ex) 屋久杉、緑の丘陵地、お花畑（アルプス・ヒマラヤ）、日本のマツ林、日本の赤トンボ・蛍シダ・ヒガンバナ（無融合生殖型植物）

人間の手つかずの原生自然の再生＝不可能。

マルクス・エンゲルス⁶⁾「人間の歴史に先行する自然などというものは、…今日ではもうどこにも存在しない自然」。

→人間と自然の二分法を前提とした、人間の手つかずの「原生自然（wilderness）」の称賛＝大きな問題。

ex) 里山、都市の地形・地質・大気循環・植生、

「自然に近い生活」をする先住民＝エコロジー生活の実践者として賛美＝一面的な決めつけ。

ex) 狩猟・野焼きの禁止→先住民の伝統的生活を破壊。草原の灌木林化→野生動物の駆逐。

パッチワーク状の緩衝帯の欠如→自然発火で広大な土地焼失。

グーハ⁷⁾：「自然を楽しむことは、消費生活の不可欠の要素」であり、「ほとんどのアメリカ人にとって、何千マイルも車を走らせて、国立公園で休暇を過ごすことは、完全に首尾一貫した行為なのである」。

「アメリカ人は、広大で美しく、人口がまばらな大陸をもっており、経済的にも政治的にも優位であることを利用して、地球の大部分の天然資源を利用することができる。『原生自然』と『文明』の両極は、内的に首尾一貫した統一体の中では相互に共存しており、両極の哲学者はこうした文化の中では卓越した地位を与えられている。逆説的に見えるかもしれないが、スターウォーズ（宇宙戦争）の技術とディープ・エコロジーがともに、西洋文明の先端地域であるカリフォルニアに最大の表現場所を見つけているのは偶然ではない」。インド・アフリカでの原生自然の保護・管理は主に「豊かな観光客のため」になされ、「貧しい人々の生活にはるかに直接的な影響を及ぼす環境問題（例えば、燃料、飼料、水不足、土壌の侵食、大気・水汚染）」が無視ないし軽視される。「原生自然の保存を第三世界に適用することは明らかに有害である」。

「厳しい意図せざる結果」

ex) フロン→オゾンホール破壊、環境ホルモン、薬剤耐性菌、人間の抵抗力低下

エンゲルス⁸⁾：「人間は、…自然を自分の目的に奉仕させ、自然を支配する。…しかしわれわれは、われわれ人間が自然にたいしてかちえた勝利にあまり得意になりすぎることはやめよう。そうした勝利のたびごとに、自然はわれわれに復讐する。なるほど、どの勝利もはじめはわれわれの予期したとおりの結果をもたらす。しかし二次的、三次的には、それはまったく違った、予想もしなかった作用を生じ、それらは往々にして最初の結果そのものをも帳消しにしてしまうことさえある。メソポタミア、ギリシア、小アジアその他の国々で耕地を得るために森林を根こそぎ引き抜いてしまった人々は、そうすることで水分の集中し貯えられる場所をも森林といっしょにそこから奪いさることによって、それらの国々の今日の荒廃の土台を自分たちが築いていたのだとは夢想もしなかった。アルプス地方のイタリア人たちは、北側の山腹ではあれほどたいせつに保護されていたモミの森林を南側の山腹では伐りつくしてしまったとき、それによって自分たちの地域でのアルペン牧牛業を根だやしにしてしまったことには気づかなかつた。またそれによって一年の大半をつうじて自分たちの山の泉が涸れ、雨期にはそれだけ猛威をました洪水が平地に氾濫するようになるうとは、なおさら気がつかなかつた。…こうしてわれわれは、一步すすむたびごとに次のことを思いしらされるのである。すなわち、われわれが自然を支配するのは、…なにか自然の外にあって自然を支配するといったぐあいに支配するのではなく、—そうではなくて、われわれは肉と血と脳髓ごとごとく自然のものであり、自然のただなかにあるのだということ、そして自然にたいするわれわれの支配はすべて、…われわれが自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しようという点にあるのだ、ということである」。そして、「目的と結果との対応というこのような物指を人間の歴史にあててみると、現代の最も発達した諸民族の場合でさえ、そこではまだ予定されていなかった目標と達成された成果とのあいだには

いつでも巨大な不一致が存在していること、予期せぬ作用が支配的であり、統御されない力のほうが計画的に発動させた力よりもずっと強大であることをわれわれは見いだす。そしてそのことは、人間の最も本質的な歴史的活動（…中略…）が、統御されない力から生ずる偶発的影響のあいつぐ交替出現にかえって屈服させられ、意図していた目的は例外的にしか実現されずにその正反対のこのほうがずっと頻繁に実現されているというあいだは、そうなるほかはありえないのである」。

自然の摂理の前に、人間の善意の有無は無関係。

ex) 砂漠の緑地化→感染症を媒介する貝や昆虫の増殖。砂漠の希少生物種の絶滅。

絶滅危惧動物の人工飼育、野生放流→ヒトウィルスの感染。

メダカの放流→遺伝子攪乱。

バクテリア・ミミズによる汚染浄化→バイオ・ハザード、汚染拡散・生物的濃縮による二次被害。

山間部のダム・道路工事、脱コンクリート・緑化事業→シカの大繁殖→原生林の破壊。

BUT 人間＝因果関係の認識という知・能力を駆使

→意図せざる結果が自らの「生命－生活」にとって厳しい意味をもつことを認識

→危機を回避するために、ますます目的意識的・知的に行為。

【7. 人間の主体性】

人間＝自然の因果関係のすべてを完璧に認識、完全に目的意識的に制御することは永久に不可能。

BUT 人間＝目的意識的・知的に自然に働きかけ、自然を制御する営みをやめるわけにいかない。

∴ それをやめた時＝人間という生物種が減じる時。

因果関係の認識に基づく目的意識的の行為によって環境適応を凶ってきた人間という生物種の宿命。

人間という生物種が「生きる」こと、その滅亡の日まで「生命－生活（life）」をまっとうすること。

＝人間の主体性、環境問題の原点。

＝人間が知・科学を発展させなければならない最大の客観的根拠、発展を希求する最大の主観的動機。

ゲーテ⁹⁾：「知恵の最後の結論はこうだ、生活でも自由でも、これに値いするのは、それを日々に獲得してやまぬものだけだ。だから、ここでは、危険に取りまかれて、子どもも、おとなも、老人も有為な年を過ごす」。

ロラン¹⁰⁾：「けっして誤ることのないのは何事もなさない者ばかりである。生きてる真理のほうへ邁進する誤謬は、死んだ真理よりもいっそう豊饒である」。

マルクス¹¹⁾：「人間はただたんに自然物であるだけでなく、人間的な自然物である。ということは、己れ自身にたいして存在するものであり、それゆえに類存在であるということである。人間はそのような類存在として己れを己れの存在においても己れの知においても証し示さずにはいない。したがって人間的対象は直接にそこにあらわれてあるがままの自然対象でもなければ、また直接にあるがままの、対象的にあるがままの人間の感能もまた人間的感性、人間的対象性なのではない。自然は－客体的にも－、また自然は主体的にも直接に人間的の本質に適合してそこにあるのではない。そして自然的なものはすべて生成しなければならないように、人間もまた彼の生成活動、つまり歴史をもっている。しかしこの歴史は彼にとっては意識的な生成活動であり、したがって意識をもってする生成活動として、自らを揚棄する生成活動なのである。歴史は人間の真の自然史である。…類生活は人間の場合でも獣の場合でも、身体的の一つには、人間が（獣と同じように）非有機的自然によって生きるところにあるのであって、人間が獣として普遍的であればあるほど、それだけ彼の生きる素である非有機的自然の範囲は普遍的である。植物、動物、石、空気、光等々が、あるいは自然科学の対象、あるいは芸術の対象、－彼によってまず享受と消化のために調整されねばならないところの彼の精神的な非有機的自然、精神的糧として－観想的に人間的意識の一つの部分に成すように、それらはまた実践的にも人間的な生活と人間的活動の一つの部分に成す。肉体的に人間が生きるのは、ただこれらの自然産物 — これらがいま食物、燃焼、衣料、住い等々、どんなかたちであられるかは別として、— によってのみである。実践的には人間の普遍性は全自然を…彼の非有機的身体たらしめるところの普遍性においてこそあらわれる」。

「持続可能な発展・開発」≠客観的に永遠に持続可能な発展・開発。

完璧に計画・制御された永久機械のような循環型・リサイクル型の発展・開発。

「持続可能な発展・開発」＝つねに生起してくる「予期せぬ厳しい結果」の主体的な認識・克服過程。

【8. まとめ】

《克服すべき「常識」》

地球や自然は有限だ。だから人間の生産力や欲望に「成長の限界」を設け、あるいは循環型の経済・社会を構築しなければならない。

NO! 地球・自然＝人間にとって無限。（人間は自然の一部。有限なのは人間）

∴ 自然：つねに人間の予期せぬ結果・意図せざる結果をつきつけてくる。

& 人間：自然を完璧に認識・制御する循環型の経済・社会を永遠に実現不可能。

& 自然：つねに人間の「生命－生活」の維持に好都合とは限らない。

∴ 人間：自らの「生命－生活」の必要に基づき、自然を変革・改造し続けなければならない。

人間：自然の一部としてしか生存できないからこそ、自らが生存可能な自然を主体的に維持・再生産しなければならない。

& 脳の発達・因果関係の認識→目的意識的な自然改造。

＝「労働」を通して、人間という生物種に「なってきた／進化してきた」。特異な進化。

→人間：「生命－生活」を維持するため、より深く因果関係を認識、
危機回避に向けて目的意識的に行為。

参照・引用文献

- 1) エンゲルス, F. (1968) 「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」 (村田陽一訳) 『マルクス・エンゲルス全集』20巻、大月書店 88～90頁。
- 2) エンゲルス, F. (1968) 「自然の弁証法」 『マルクス・エンゲルス全集』20巻、大月書店 354～355頁。
- 3) プレヒト, B. (1979) 『ガリレイの生涯』岩波文庫 129頁。
- 4) ポパー, K. R. (1971) 『科学的発見の論理』上下 (大内義一・森博訳) 恒星社厚生閣。
- 5) エンゲルス, F. (1968) 「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」 (村田陽一訳) 『マルクス・エンゲルス全集』20巻、大月書店 118～119頁。
- 6) マルクス, K.、エンゲルス, F. (1963) 「ドイツ・イデオロギー」 『マルクス・エンゲルス全集』3巻 大月書店 40頁。
- 7) グーハ, R. (1995) 「ラディカルなアメリカの環境主義と原生自然の保存」小原秀雄監修『環境思想の多様な展開』 (浜谷喜美子訳) 東海大学出版会 82～84頁、87～88頁。
- 8) エンゲルス, F. (1968) 「自然の弁証法」 『マルクス・エンゲルス全集』20巻、大月書店 491～492頁、353～354頁。
- 9) ゲーテ, J. W. (1965) 「ファウスト悲劇」 (高橋健二訳) 『世界文学全集』2、河出書房新社 309頁。
- 10) ロラン, R. (1986) 『ジャン・クリストフ』3巻 (豊島与志雄訳) 岩波文庫、184頁。
- 11) マルクス, K. (1975) 「1844年の経済学・哲学手稿」 (真下信一訳) 『マルクス・エンゲルス全集』40巻、大月書店 501～502頁、436頁。